

令和6年度
浜黒崎地区における身近な拠点づくり社会実験
事業報告

社会実験の概要

(1) 社会実験の目的

買い物などの生活機能やアクセスするための移動手段、住民同士の交流など、暮らしに必要な機能について、地域と行政が連携しながら、地区センターを身近な拠点として位置づけた社会実験を通し、郊外部での持続可能なまちづくりの在り方を検討することを目的とする。

(2) 実施体制

浜黒崎地域活性化協議会（浜黒崎校下自治振興会）



全3回のワークショップを開催し、
企画から役割分担などを整理

(3) 社会実験の開催日時

令和6年11月17日（日）12～16時

(4) 社会実験の開催内容

HP内のチラシ参照

社会実験の概要

(5) 周辺環境



社会実験の様子



- 隣接する小学校敷地も活用し、活性化協議会のメンバーが主体的にキッチンカー事業者などに呼びかけをし、マルシェを開催した。
- テントなどの什器は社会実験経費から拠出
- 小学校のバザーと同日開催とすることで、自然と地域の方々が来場しやすくする工夫をした。
- 地域内にある店舗や手作りアクセサリーを販売する方など、浜黒崎地区で生業を行うみなさんが屋台となって出店。
- 軽トラックを使って、地域で生産された農産物を販売(利益は子供たちのための育友会費に還元)するなど、地産地消や食育にも繋がる取組みが行われた。



社会実験の様子



- 浜黒崎地区に本社を有するジャパンメディック株式会社がブース出展し、VR体験会を実施。
- Netzトヨタ富山などのご協力により、キッチンカーへの電源供給には、水素自動車や電気自動車を2台活用した。
- 地域の社会福祉協議会などが主体となって開催する健康づくりフェスティバルも同日開催するなど、多くの企業や主体との協働も進められた。



地域住民

協働による
参加者の獲得
・PR発信

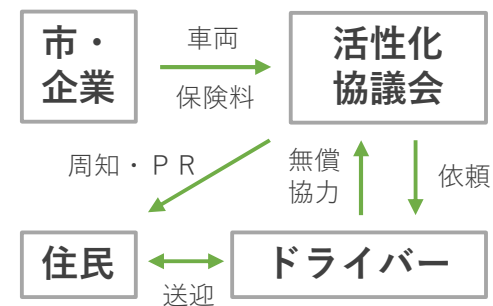
地元を知る機会
・リピーター

地域団体・地元企業

社会実験の様子



- 浜黒崎地区では、従来より、社会福祉協議会が主体となって高齢者向けの買い物支援事業（ボランティアでスーパーなどへ送迎を行う）が行われていた。
- この地域コミュニティの仕組みを活かし、ドライバーは地域住民が行い、車両保険料は損保ジャパンが提供する地域ボランティア送迎用の保険制度を活用（市が負担）によるボランティア送迎を実施した。
- 車両については、Netztヨタ富山のご協力により、乗用車の無償提供をいただいた。
- 送迎の受付は、地区センターを窓口とし、デマンド方式（事前予約）によって行った。



社会実験の様子



- 浜黒崎地区は、高齢化率の高い地域であるため、本取り組みと併せて、地区センターの諸室を活用し、高齢者向けの様々なサービスや交流が行われた。
- 地区センター内の和室では、高齢者向けのヘアカットサービスが行われ、外出しづらい環境にある高齢者がボランティア送迎を使って来場するなど、移動と組み合わせた光景が見られた。
- また、スマホの個別相談会や地域の困りごと相談、2階ホールでは、地元の住職による地域の歴史講座も行われ、多くの地域住民が参加した。

住民

サービスの享受

地区センターの有効活用

サービス提供

諸室の無償提供

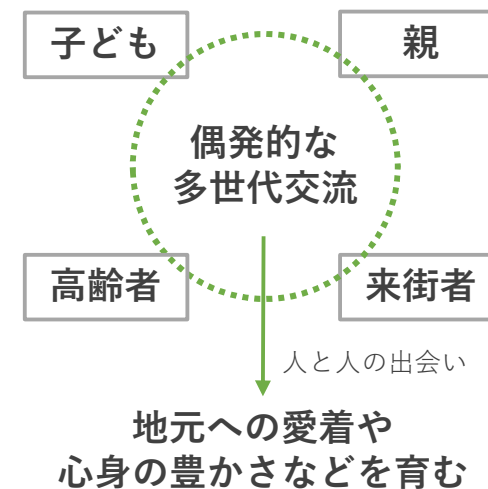
事業者

地域団体

社会実験の様子



- 地区センターに隣接する小学校体育館などの施設も活用し、幅広い交流事業を実施した。
- 地域住民が講師となった絵手紙体験や、誰もが負担少なく体を動かせる軽スポーツ体験（カローリングやグランドゴルフ）など、地域の高齢者と子ども達がふれあいや交流を深める取り組みが行われた。
- 子ども達向けには、だかし屋や縁日（的当てや輪投げなど）、こども食堂による飲食提供などもあり、多世代が自然と顔を合わせて交流する機会となった。

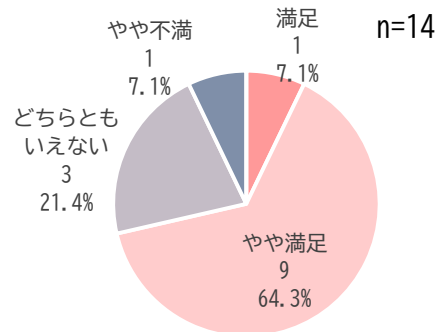


社会実験の分析

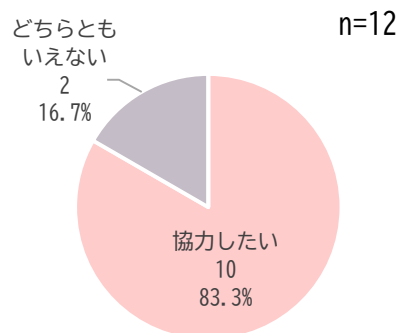
(1) 関係者ヒアリング調査

- 主体的に取り組んだ浜黒崎活性化協議会メンバーへのアンケート調査では、約7割の参加者が満足・やや満足と回答し、約8割が継続実施に向けた協力の意向を示す結果となった。
- また、参加事業者や団体などへのヒアリングでは、地域交流や住民同士の共助といった面が評価され、今後のコミュニティ形成に向けた経験値の獲得に繋がったという声もあった。

社会実験の満足度



継続実施への協力意向



参加した事業者、関係団体等へのヒアリング

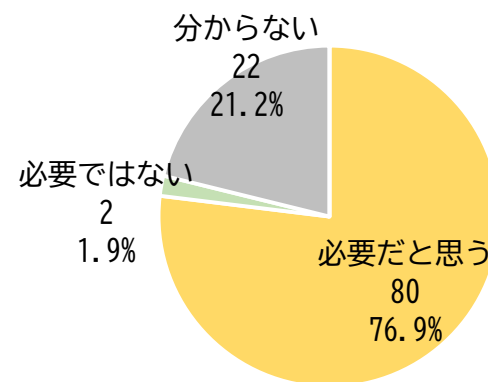
地元商店やキッチンカーの出店	- 初開催にもかかわらず、マルシェがしっかりと地域交流の場となり、軒並み売り切れになった。 - 雨天にもかかわらず多くのお客さんが来てくれ、地域の皆さんが楽しみにしてくれていた。 - 店舗での販売を自主的に手伝ってくれる方もいた。地域住民同士ならではの協力関係もあり、それがマルシェの醍醐味になり得ると思った。 - 大広田から来場してくれた人がいたこと、また、インスタで情報を拡散してくださった。 - 子供たちからおじいちゃん、おばあちゃんまで、たくさんの笑顔を見ることが出来た。
ボランティア送迎	- 社会福祉協議会で続けている「買い物・お出かけ支援」の運転ボランティアの素地があったことから、今回の社会実験においても対応ができた。 - 今年度、小学校での住民運動会に参加するのが困難だという声が町内から上がっており、送迎ボランティアの試行は良い経験となった。
次世代モビリティの乗車体験等	想像以上に、情報が地域に伝わっていた。

社会実験の分析

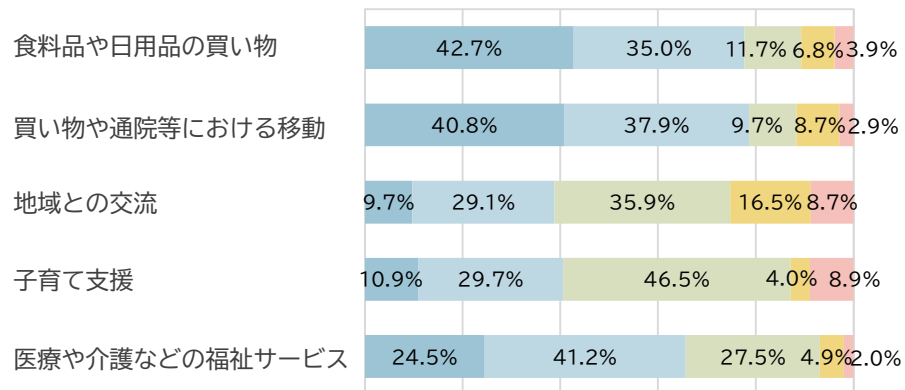
(2) 事後アンケート調査

- ・ 地域内の町内会長や班長、PTA役員などを対象に行った事後アンケートでは、約8割が本事業のように、地域による支え合いの取組が必要と回答。
- ・ 人口減少が進む中で、将来の不安な生活行動として、「買い物」・「移動」・「医療福祉」が挙げられているが、地区センター等が身近な拠点として機能した場合には、将来への不安が低減される結果となった。

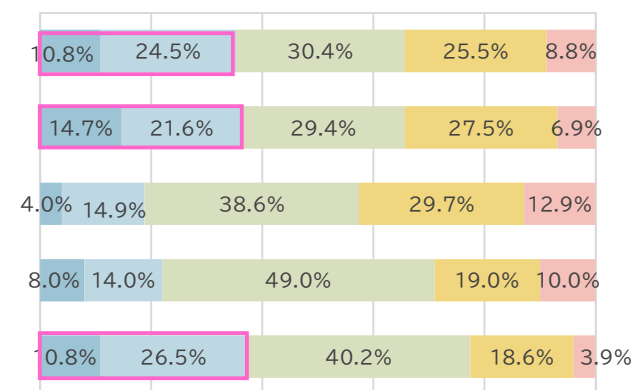
今後も本事業のように地域が支え合う取組は必要だと思いますか？



今後、人口減少が進む中で、将来の日常生活における不安はどのようなことですか？



将来、暮らしに必要な機能を備えた身近な拠点が実現した場合、あなたは日常生活に対してどのように感じますか？



■ 不安を感じる ■ やや不安を感じる ■ どちらともいえない ■ あまり不安ではない ■ 不安ではない



2025.4月作成

作成：富山市都市計画課